

ハワイのカポレイ小学校との国際交流 - テレビ会議システムを活用した国際交流学習の授業実践 -

第 6 学年
大阪府河内長野市立天野小学校
安田 喜孝
kwnamans@educet.plala.or.jp
http://academic1.plala.or.jp/amasho/
キーワード 国際理解, 英語活動, テレビ会議, 国際交流

1. はじめに

本校は、平成 8 年度より 3 年間、文部省の研究開発学校として「小学校での英会話等」の研究に取り組み、平成 11 年度は、研究開発継続校として「国際理解教育を柱とした総合的な学習」のあり方についても取り組んできた。本年度は、再び文部省の研究開発学校として委嘱を受け、教科「英語」を新設しての研究を進めている。特に、「聞く」、「話す」の音声を中心とした英語活動に取り組んでいる。Native English Teacher (以下 NET) の英語の授業があり、英語をコミュニケーションの道具として活用できる環境にある。

また、テレビ会議システムを用い、遠く離れた相手とリアルタイムで会話することにより、そこから得られる情報は、子ども自身が、実感として肌で感じることができるものである。

この交流によって、子どもたちの英語を使う必然性を高めると共に、学習意欲を高め、自信を持って英語を運用できるようになるのではないかと考え研究を進めることとした。

2. 交流までの活動

交流する相手校探しから始まった。本校 NET の知人の紹介で、テレビ会議ができる学校を探し、ハワイのカポレイ小学校に決まった。

まずは、自分たちを相手の学校に分かってもらうために、ビデオレターを送ることになった。子どもたちで話し合い、学校生活の様子面を撮影することになった。自分たちで、撮影係や音声、リポーターなど分担し、英語を使って自己紹介や学校の様子、先生紹介(図 2)、授業風景、和太鼓演奏などを紹介した。特に、給食の様子がおもしろかったようで、おはしを使っていることに興味を覚えたのだろう。

また、ビデオと一緒に子どもたちに人気の漫画本も送った。

3. ハワイの友だちと話そう

(1) 初めて、テレビ会議で交流

昨年 10 月に第 1 回目の交流を行った。(図 3) スクリーンに映し出されたハワイの子どもたちの映像に、歓声が上がった。

自己紹介から始まった。グループごとに自分の名前と趣味や特技を英語で話した。そして、総合的な学習で取り組んでいる個人カリキュラムの課題について、いくつかの質問もした。また、NET が間に入り、相手に伝わらなかった言葉を補足したり、こちらが聞き取りにくかった内容を説明したり、交流がスムーズに行くように配慮した。

子どもたちにとって、英語に自信のない子が自分の言ったことに対して、ハワイの友だちが答えてくれたことで、英語が通じた喜びを得たようであった。また、ハワイの子どもたちからは、ウクレレを見せてもらったり、スキューバを趣味にしている子が道具を見せてくれた。

(2) 毛筆で日本語を書いてみよう



図 1 本校のホームページ



図 2 先生にインタビューしているところ



図 3 第 1 回テレビ会議の様子

E スクエア・プロジェクト成果発表会

1 回目の交流の後、カボレイ小学校からビデオレターが届いた。そこには、こちらが送った漫画本を見ている子どもの姿が写っており、ハワイの友だちに親近感を抱いた。

そして 2 回目の交流では、そのビデオレターについての質問を投げかけた。

また、毛筆で“ハワイ”と“カボレイ”と英語で書き方を説明しながら書いた。(図4) その様子を見ていた、ハワイの子もたちも、紙に同じように書きだし、その字の上手さに日本の子どもたちは、感心していた。

この活動を通して、遠く離れた国同士が、距離を感じさせないで交流できたところによさがあった。また、子どもたちも話してみたいという欲求を持ち、咄嗟に“Pardon?”、“OK”と英語が飛び出していた。

(3) 一緒に歌おう

3 回目の交流(図5)となると、子どもたちも交流に慣れてきた。今までの交流では、質問することが多く、他の子どもたちにとっては、退屈な場面もあった。この経験を踏まえて、全員で何かを伝えようと考えた。

一つは、合唱である。ちょうどクリスマス前であったので、「赤鼻のトナカイ」を、歌と手話と演奏に分かれて、披露した。

二つは、オンライン・コミュニケーションゲームである。こちらが問題を出し、相手に答えてもらう。テレビ会議だと音声だけでなく、映像も活用できる。そこで、自己紹介を兼ねたゲーム(“Who am I?ゲーム”)を行った。ルールは、単純で自分の名前と生年月日や趣味などを一人ずつ言い、後で“Who am I?”や“When is my birthday?”と質問するのである。ハワイの友だちが、見事正解したときは、“That's right”と、その成果を褒め称えた。見ている子どもたちも一緒にになり、楽しく交流できた。楽しみながら英語を学んだのである。

(4) ゲームをしよう

前回の交流で、子どもたちは、ゲームでコミュニケーションが図れることを知った。遊びの中で、意思の疎通をしていくのである。

子どもたちが考えたゲームは、“日本語クイズ”であった。簡単な日本語を紙に書いて見せ、何のことがかを当ててもらうのである。付け加えて、英語でヒントを出したり、実物や絵を見せたりするのである。言葉そのものが、ゲームのネタになっているのである。日本語を相手に知ってもらうことにもなり、また、自分たちも英語で何と言うかを知る機会となった。

そして、5 回目の交流では、相手校の児童がホームステイをしに来校し、さらにオンラインでも交流した。

4. これからの課題

英語活動に取り組んで5年になるが、子どもたちに決してスラスラ話せるようになることを目的としていない。6年生であっても、たどたどしく、自分の名前を言っている子どももいる。本校のねらいは、自分に自信を持って、相手とコミュニケーションを持つことである。このテレビ会議を通じて得た自信は、様々な場面で生かされていこう。

課題としては、システムの問題がある。本校は、ISDN 回線を使用しているため、若干の音声や映像にズレがあることだ。話した言葉が、すぐに伝わらなかったり、映像がややコマ送りにになったりする。早い動きは伝わりにくい。などの問題がある。

また、言葉の限界である。5年間英語に触れ親しんできたとはいっても、ハワイの子どもたちと言葉のキャッチボールを交わすまでには至らない。そこで必要なのが、NET の力である。子どもたちも、NET がそばにいてくれるだけで安心して話せるといっている。

これらの活動を踏まえ、さらに英語と情報機器を子どもたちのコミュニケーションの道具として活用できる学習のあり方を追及していきたいと考えている。



図4 第2回テレビ会議の様子



図5 フラダンスを教えてもらっている様子



図6 オンライン・コミュニケーションゲーム